
完全なる世界の『孤高の鷹』

蜂蜜の雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完全なる世界の『孤高の鷹』

【Nコード】

N0964Z

【作者名】

蜂蜜の雫

【あらすじ】

大戦期の黒幕、悪の秘密結社『完全なる世界』

その組織に身体に毒を流す特殊な体質を持った鷹族の少年がいた。少年は世界を巡り、偽りの正義を滅ぼしていく・・・

プロローグ（前書き）

思い切ってやってみました。
よろしく願います。

プロローグ

魔法世界の半分の領土を占めるヘラス帝国を恐怖に陥れている男の存在があった。

その男はヘラス帝国の大富豪や位の高い役職の者を襲う殺人鬼だった。

その男に殺された者は酷いことに身体が切り裂かれていて原形を留めておらず

殺人現場はまるで嵐が来たかのように荒れていた。

その惨い殺し方から男は『嵐の殺人鬼』と言われるようになっていた。

しかし、その惨い殺し方に気を取られ男の本当の殺人方法に気づく者はいなかった。

そしてある夜、また噂の殺人鬼に殺められようとしている大富豪がいた。

警備についていた帝国の魔法使いは既に殺されて殺人鬼は富豪に歩み寄っていた。

殺人鬼は闇よりも禍々しい紫の衣を纏い、血に染まった鈍く輝く紫の刀を持ち

紫の衣を突き破り背中に夜よりも暗い漆黒の翼を広げる、灰色の髪に深紅の瞳をした少年だった。

見た目からして13〜15歳位の年頃で、妖しく美しい容姿をしていたが

少年の深紅の眼は光を失ったように鋭く冷めていて感情が欠落しているようだった。

少年は手に持っている血に染まった刀を富豪の男の首元にひたりと当てた。

男は尻もちをついて壁に追い詰められていて逃げ道を失っていた。首元に当たっている刀を目だけを動かして見た後、再び少年を見上げた。

刀に付着した血の生温かさが男に恐怖を絶望を与えていった。

「きつ貴様ツ！・・・『嵐の殺人鬼』ツ！　こんなことをして良いと思っっているのか！

私を手にかけるなどと愚かな・・・今ならその刃を退ければ見逃して・・・」

「うるさい、クズが・・・」

「ギャアアアアアアアアアア！」

少年は刀を振り抜き男の首元に一センチほどの深さの刀傷をつけた。

「簡単には殺しはしない、長い苦痛を体験して・・・死ぬ・・・」

「ガアアアアアア来るじいッ！身体が熱いッ！」

男は喉元を両手で押さえ悶え苦しむように部屋を転がり回った。そして壊れたかのように辺りを次々を荒らしていき部屋は割れた高価な壺の破片や砕け散った石像が転がっていた。

やがて苦しみは男をあの世へと誘い、部屋に静けさが戻って来た。
少年は男が息絶えるまで見届けた後、遺体を刀でバラバラに切り裂いていった。

もう気づかれた方もいるだろう、少年の本当の殺人方法・・・それは毒殺

バラバラに切り裂かれた遺体はその毒を隠すための行動だったのだ。しかし、本来こんなことをしてもほとんど意味はない・・・なぜなら少年の毒は解毒剤が作れない特殊な猛毒だったのだ、しかしこの毒は売られているものでも、少年が調合したものでもない・・・

これは少年が生まれつき流している血液と魔力に含まれていた毒だった。

少年に触れた者はたちまち毒に侵される・・・

遺体をバラバラに切り裂いた後、少年は窓を突き破り、漆黒の翼を羽ばたかせ

月夜の空を飛んで行った。

そして、この少年に新たな噂が帝国に広まりつつあった。

殺人現場に決まって天に向かって翼を広げる鳥の絵が血で描かれていた。

これは大戦期の悪の秘密結社、『完全なる世界』に続く悪夢の始まりだと・・・

これは『完全なる世界』に救われた鷹族・・・『はやて颯』の物語・・・

1話 ひとときの帰還（前書き）

三人称でいこうと思いましたが、やはり本人の視点ですね

あとヒロインのことですが、石投げないでくださいよ
俺はこのキャラ、結構好きなんですよ、可愛いし

1話 ひとときの帰還

旧オスティア・・・20年前の大戦の終わりに起きた広域魔法消失現象により

空に浮いた島、オスティアの大半が地に落ちて魔獣の巢食うようになった場所

人の住むところで無くなったその場所は干渉されることはなかった。よって、普通の人は立ち入らない場所・・・

霧が濃く、薄暗く魔獣の呻き声のするその場所に一人の人影があった。

帝国を騒がす噂の『嵐の殺人鬼』・・・^{はやて}颯である。

颯 said

俺は旧オスティアの市街に向かって歩いていて。

片手には手軽に持てるサイズの本を持って読んでいる。

その道中に俺の身長の倍はある角の生えた虎が立ちふさがった。腹が空いているのか、よだれを垂らしていて、汚い奴・・・

「グルルル・・・」

「見ない顔、どこから迷い込んだ魔獣か」

「ガオオオオッ！」

雄叫びをあげながらその大きな身体で飛び掛かって来た。

「俺に出会うとは、運が悪かったな魔獣・・・」

俺は片手で本を持ったまま恐れることなく歩き出した。

振り下ろされる魔獣の腕を横に飛んでかわし、喰らいつこうとする牙を上にかわす。

その際に本を持っていない手で魔獣の頭にふわりと触れる。

魔獣の後方に着地すると俺は再び歩き出した。

魔獣が振り返ってもう一度、俺を襲おうとしたが魔獣はピタリと動きが止まった。

そして力が抜けたようにバタリと倒れる。

「死なない程度に毒を抑えた、二度と牙を剥くな魔獣・・・」

それからの道中、数匹の魔獣に遭遇したが俺を襲う魔獣はいなかった。

まあこの旧オスティア周辺の魔獣を屈服させているから

俺の猛毒は野生の魔獣の本能を恐怖させるのに打ってつけだった・

・
こんな醜い力でも使いようはあるんだよな・・・

無人のこの旧オスティアはもう俺が支配していると言っても過言ではない。

旧オスティア市街に着いた俺は一番高い石の建物の屋根の上に寝転

がった。

下の方では魔獣たちが俺を讃えるように静かに見上げていた。石のひんやりとした冷たさは居心地を良くし、本を読むのに最高の場所だ

そこへふわりと降り立つ一人の少年が見えた。

「相変わらず変わった趣味をしているね、颯君」

「別に教え込んだ訳じゃない、魔獣たちが勝手にやってるだけ」

俺の隣に降り立ったのは白髪の少年、フェイト。

だけど俺は本を読むことを止めず、見向きもしない。

「フェイトが俺の所に来るとは珍しい、焰の代わりに説教？」

「まあそうかな、焰君は君を怒るのに飽き飽きしてね」

「あっそう、焰に怒鳴られるの疲れるし、良かった・・・」

焰はフェイト側近の一人、俺に敵意と言えるものを持っている。

俺が殺人を起こす度にニュースで流れる『第二の『完全なる世界』

出現か！？』って

話題についての言い争いが絶えなかった。

でも焰が一方的に言ってるだけ、俺は聞き流してる・・・

「『嵐の殺人鬼』が騒ぎを起こす度に帝国内で警備の強化がされているのは君がよく知っているだろう」

「そんなこと気にしない、別に困らない」

「『完全なる世界』の行動としては帝国内での動きが取れにくくなっているんだ」

「俺は『完全なる世界』の行動に参加する気はない」

「僕はそれでも構わないよ、君の好きなように動けばいい。」

「・・・フェイト、俺を止めに来たんじゃ」

読んでいた本を閉じて上半身を起き上がりせ座る体勢を取った。そして会話を始めてやっとフェイトに顔を向けるとフェイトのいつもと変わらない姿と表情が目に入る。

「別に君を止めるつもりはないよ、やりたくない組織の活動をする必要もない。」

「それだと俺は組織の行動の邪魔な存在になるだ」だけどね」・・・

「

俺の発言を遮ったフェイトの声が少しの沈黙の間を作りだした。

「僕はいつか君と『完全なる世界』の組織の仲間として共に歩いて行けると信じてるよ」

「・・・そんなときが来るとは俺には考えられない」

「あくまで僕の勝手な理想だからね、どうなるかは君次第さ」

「・・・呆れた話だな、もう俺は出る」

俺は、ゆっくりその場を立ち上がりフェイトに背を向けて歩き出した。

「もう行くのかい、久しぶりに戻ったんだ、彼女に顔を見せたらどうだい？」

『彼女』という言葉に何を思ったのか、歩き出した足が止まってしまった。

「・・・あいつはフェイトの従者、俺に会う理由はない」

俺はフェイトにそう言うのと再び歩き出して建物の屋根から飛び降りた。

約80メートルの高さから着地した後、どこかに向かって進んで行く。

市街に集まっていた多くの魔獣は左右に分かれ、道を作った。他人が見れば俺はまさしく群れを従えるボスに見えるだろう。

フェイトと別れて30分が経過して旧オスティアの領地内を進んでいた。

「どこへ向かう、帝都ヘラス、それとも連合の領地・・・」

今までのように帝国領の政治家を狙うか、新しく連合領の政治家や大商人を狙うか

俺は政治家や無闇に権力を使う奴を殺すことに躊躇なんてない。

今も世界で戦災孤児が絶えないのは部族対立をずっと放っておいた

無能な奴らが原因だから・・・

「やはり帝国領の方、いくつか街を経由して帝都に向かう・・・」

向かう先が決まった俺の前に一人の少女が立っていた。
話し掛けずらいのか、目を逸らしたりしてる。

「あつ颯・・・元気だった？」

「・・・環、どうしてここにいる？」

俺の前に現れたのは焰と同じフェイト側近の一人、環
竜族の大きな角と尻尾が特徴的な奴。

「・・・ちょうど任務の帰り、偶然颯を見かけた・・・」

「そう・・・」

嘘の下手な奴・・・俺は環が右手に持っている物に目を向けた。
環はそれに気づくと素早く右手を後ろに回してそれを隠したが、は
つきり見えた。

環が持っていたのはパクティオカード、フェイトとの主従関係の証
フェイトが環をカードの能力を使って召喚したのか・・・

「颯、疲れてない？、今日一日ゆっくりした方がいい」

「悪い、急いでるんだ・・・」

「・・・また、人を殺しに行くの？」

「俺の勝手だ、環が気にすることはない・・・」

「人を殺すなんて間違ってる、例え、向こうが悪くても・・・」

「亜人種なら、『幻想』まほうしなんだから、いなくなっても何も変わらない」

「・・・『幻想』だったら、殺してもいいの？」

「そう、幻の存在は消えても誰も困らない」

「そんなこと・・・ない」

「俺たちも幻の存在、身体も心もすべて幻・・・」

「それは違う！」

おとなしかった環の声が全力で否定した。

環の目は潤んでいて、今にも涙が出てきそうだった。

「私たちの全てが幻なんて、間違ってる。確かに私たちの身体は幻かもしれない・・・」

「けど私たちの心は、幻じゃない・・・私たちが感じるものは、きっと本物・・・」

「・・・くだらない、俺はもう行く」

環を無視するように横を歩いて通り過ぎる。

「待つて・・・」

環が声をかけたが足を止めなかった。

足音を立てず、自分の存在を周囲に悟られないように進んで行く。

「約束・・・覚えてるよね・・・」

俺は振り返ることをせず、歩き続けて

「約束？・・・忘れたな、そんなこと・・・」

そう告げて背中から漆黒の翼を広げ、大きく飛翔した。

高く飛んで行くとどんどん視界が広くなり、世界を見下ろしていた。

漆黒の翼を羽ばたかせ環のいた位置から遠い場所に降り立つ。

「フェイト、余計なことやりやがって・・・」

俺はイライラをぶつけるように近くにあった岩を殴った。

岩は大きな音を響かせて粉々に砕けた。

「グルルル・・・」

岩を砕いた音に反応してやって来たのか

ここに来た時に遭遇した虎の魔獣の大きさを軽く越える黒龍が現れた。

「まったく、今日は新顔がよくやって来るな・・・」

「ギャオオオオオオオオ！」

黒龍は威圧するように咆哮した。

「お前はとても運が悪かった・・・黒龍・・・」

「ギャオオオオオオオオ！」

「俺は今とても、死なない程度に毒を抑えることができそうにない・・・！」

漆黒の翼を黒龍を煽ぐように数回羽ばたかせた。
風に毒を乗せて、じわじわと黒龍の身体を破壊していく・・・

「ギャオオオオオオ・・・オオオ・・・オ・・・」

ズドーン！ 黒龍の巨体が倒れて地鳴りが起こった。
そして黒龍はまったく動かない身体になった。

「約束・・・そんなの守れそうに・・・ない！」

俺は倒れた黒龍の頭を踏みつけた。

何度も・・・何度でも・・・

自分の気が落ち着くまで何度も踏みつけた・・・

1話 ひとときの帰還（後書き）

感想くれたら嬉しいです。

2話 颯は知らない(前書き)

感想ありがとうございます。

この話で颯が危険です

2話 颯は知らない

「おはようございますお客様、朝食をお持ちしました。
冷めないうちに召し上がりください。」

「どうも・・・」

部屋から従業員を着た女性がドアの音を立てず、退室した。
部屋の小さなテーブルには朝の食事が置かれている。

「・・・いただきます。」

椅子に座って手を合わせた後、スプーンを持って食事を取る。

朝のメニューはパンとコーンスープ、コーヒー・・・いたって普通、
旧オステリアから離れて北西の方角に進んで、この街の宿に宿泊し
た。

そして、この街に着いたときから、異変を感じる・・・

街の人たちは暗い顔をしてるし、俺を一度見て憐れむように視線を
戻した。

実に、不愉快だった・・・

「ぐちそうさまでした・・・」

食事の味はそこそだった・・・

とは言っても、何を食べようとほとんど同じ味しかない
理由は簡単、俺が触れた物は毒に侵されてしまうから、ほぼ毒の味
しかない

体内の毒を完全に抑えることができなくて、パンは手で触れた時、
コーンスープとコーヒ―は口に含んだ時、本来の味を失い、毒の味
になる・・・

生まれつき体内に毒を流す俺は当然の如く、毒の耐性が強い・・・
と言いか効かない
ほんと、嫌な体質・・・

だから俺は毒以外の味を知らない

美味しいなんて、知らない

自分の好き嫌いなんて、わからない・・・

「こんな街、さっさと出て行こう・・・」

紫の衣を着て刀を腰に差して部屋を出て、宿のロビーの受付でチェ
ックアウトして外に出た。

朝一番の太陽が眩しく、体が温まっていくのを感じる。
立ち止まって日の光を浴びた後、街の外に向かって歩く。
街に人たちは、昨日この街に来たときと同じように暗い顔をしてい
る。

・・・でもそれは、俺には関係の無いこと、一目散に街の外に向か

う・・・

「待ってくれ、その兄ちゃん！」

後ろで人を呼び止める声がある。この街に着いて初めてあんな大声を聞いた・・・

「待ってくれって、紫の服の兄ちゃん！」

・・・紫の服、俺のこと・・・？

後ろを振り返ってみる、そこには黒い髪、大きな黒目、幼い体型高そうな服を着たまだ歳の浅い少年が追って来てた。

「・・・俺に何か用、小僧？」

「お願いします、この街を・・・この街を悪魔の手から救ってください！」

何だこいつ、ただ街に泊りに来た俺に助けを求めてる・・・俺からすればそんなことをしてやる義理なんてないが・・・

「・・・話を聞いてやる、場所を移そう」

「ありがとうございます。僕の家が直ぐそこなんで案内します。」

俺はこの子どもに案内され、この子の自宅にお邪魔した。

この子どもはどうやら、この街の市長の孫らしく、それなりに裕福な家だった。

「それじゃ、話してみる・・・」

「実はこの街に月一回、決まった日時に悪い魔法使いが来るんです。」

「・・・それで？」

「この街の若い女の人を捧げない限り、悪魔たちを放ち街を破壊し続けると・・・」

くだらない話、女如きに飢えた間抜けな魔法使い如きに街は怯えるのか・・・

この程度の事態に帝国の偉い奴ら、何をしてるのだから・・・

「今日、帝国から兵士が送られて来るんですけど、日時までに到着できそうにないみたいで」

「ひとつ聞く、その魔法使いが街に来るのはいつだ？」

「今日の夜7時ちょうどです。」

今が大体朝の9時頃だから約10時間後くらい、その間この街にい

ないといけないか・・・
でも、昨日から続くイライラを発散させるいい機会

「わかった、引き受ける」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

子どもの顔がパアッと明るくなる、その時誰かがこっちに近づく気配がした。

「大きな声を出してどうした『ワイル』、そちら方ははお客様かな？」

「あつパパ、お帰りなさい、今日はお仕事早く終わったの？」

「ふふっ・・・まあな」

やって来たのはどうやらこの子ども、『ワイル』のお父さんらしい黒いスーツにネクタイをした、しっかりしてそうなビジネスマン、鼻の下にちよび髭を生やしてる・・・

「パパ聞いて、この兄ちゃんがね、悪い魔法使いをやっつけてくれるんだよ！」

ワイルがそう言うと、仲睦まじく見えた親の表情が一変した。

「ワイルツ！ 関係ない人を巻き込んでいいと思ってるのか！ 迷惑だろう！」

「だって・・・このままじゃこの街はあいつの思うままだよ！」

「だからって・・・！」

「俺のことなら、心配しなくていい・・・」

「しかしだね君ッ・・・！」

「俺にも利益がある、もちろん、金じゃない」

俺とワイルのお父さんは黙ったまま睨み合うことになる。

「・・・クッ、わかりました君の勝手にしなさい！ 死んでも知りませんよ！」

ワイルのお父さんは怒った表情でどこかに行ってしまった。

「ごめんなさい、でもね、お父さんはいつもあんな風じゃなくて優しいんだよ」

「別に気にしてない、心配しなくていい・・・」

「ありがとう・・・そう言えば自己紹介してなかったね、僕はワイル」

「・・・颯^{はやて}」

「よろしくね、ハヤテ兄ちゃん！」

「・・・よろしく」

俺はその後、ワイルに個室部屋に案内されて

女に飢えた腐った魔法使いのやって来る日時まで厄介になった。

そして、その日時の30分前、俺はワイルに案内されてある場所に向かっていた。

腐った魔法使いはこの街から少し離れた森の中で生贄の女を待つているらしい。

約束の場所に着くとワイルを街に帰らせ、俺は魔法使いを待った。

「約束の7時まで後、10分・・・もう少し・・・」

それから切り倒された木の年輪に座って待つこと5分、ついに魔法使いが現れた。

歳は20代後半、男、ぼろいローブを着て、手に魔法書を持って数体の悪魔を連れている。

「おい、お前は誰だ？ 女はどこにいる？」

「そんなものはいない、ここにいるのは、貴様を絶望に導く・・・

『病魔』」

「病魔だぁ・・・んなもん要らねえんだよ、さっさと女を連れてこい！」

「安心しろ、貴様はちゃんと女の所に連れて行く、瀕死の状態で・・・」

「オーケー・・・お前が死にたいってのがよくわかった、今すぐ殺してやるからよ！」

奴は手に持っていた魔法書に魔力を注ぎ込み、さらに悪魔を召喚し

た。

召喚された悪魔から感じる魔力は大きい、中級クラスの悪魔が約、20体・・・

腐った魔法使いにしては、かなりの実力を持っている・・・もしくは

「行けっ悪魔共！ あの野郎を^{なぶ}蹴り殺してしまえ！」

「「「ヴォオオオオオオオオオオオオ！」」」

「ハハハッ待ち伏せて不意を突かなかったことを後悔するがいい！」

悪魔たちが素早い動きで襲いかかって来る。

さすがは中級クラスの悪魔、と言ったところだろうか
あと、待ち伏せをしなかったのは、簡単に倒してはつまらないから、後悔もしてない

「俺はこの程度の集まりに、負けない・・・」

四方八方から繰り出される悪魔の攻撃をすべてかわし、三体に突きを喰らわす。

その時、悪魔に毒が流れ、三体は苦痛の声をあげ、還っていった。
それを見た他の悪魔は後退して術者の前で止まった。

「何ッ一撃で俺の悪魔三体を還しただど!? バカな、お前何をした!?」

「自分の手を明かすバカ、存在しない・・・」

「フンッ・・・悪魔を三体倒したからって調子に乗るなよ、見てろ・・・」

そしてまた、魔法書に魔力を注ぎ込んで、悪魔を召喚した。
数はさつきよりも多く、合わせて40近くの悪魔が奴の周りを囲んでいた。

「フッフ、ハアハッハッハ見るこの悪魔の軍勢を！腰に差した刀は抜かなくていいのか？」

「悪魔の召喚しかできない、芸の無い奴・・・」

「ああ、何だと・・・」

「それに、この刀は貴様如きに抜くほど、安くない・・・」

「・・・上等だ、その刀を使う前に殺してや・・・！」

俺は奴が言い終わる前に瞬動を使い、悪魔の軍勢を通り抜け、懷まで接近した。

そして奴の視界を塞ぐように顔を鷲掴み、持ち上げ、身体を宙に浮かす。

奴は片手で俺の腕を掴み、悶えている。

そして数秒後、俺の手から浴びた毒がさらに苦痛を与える。

「ガァッグアアアアッ、何をしている悪魔共！早く俺を助ける！」

奴が悪魔に命令を送っても、俺を襲う奴はいなかった。

何故なら、悪魔たちも俺の毒を受けてやられている・・・

いや、感染して・・・と言った方が正しい、術者によって供給される魔力によって

ここまで言えばわかるだろう、俺の毒の解毒薬が作れない理由

俺の毒は触れたもの自体だけでなく、そのものの魔力、さらには精霊をも侵すから

魔法技術で身体の傷や毒を治せても、魔力はどうやっても治せない・・・

だから最初に言った、俺は『病魔』だって・・・

俺は奴から魔法書を奪い取り、さっきより強い毒の魔力を直接注射ぎ込んだ。

悪魔共はこれまでにない苦痛の声をあげて消えていった。

正直、術者は雑魚だった、この高価な魔法書に頼った力でいい気になっっていた間抜け

だけどこれほど高価な魔法書、帝国ではヘラスがすべて管理してたはず・・・

「ずまながった、お願いだ・・・ガフツ・・・許じで・・・！」

「貴様の涙で俺の手を汚すな、クズ・・・」

こいつの顔を鷲掴んだまま振りかぶり、投げつけ、木に叩きつけた。

「もう少し強い毒で貴様に苦痛を、与えてやる・・・」

「グアア、ゴフゴフツ・・・お願いだ・・・ガハツ・・・命だけは・・・」

「約束しただろ、瀕死の状態で女の所に連れて行ってあげるって、長時間の苦痛の後に」

「嫌だ・・・それなら早く殺し・・・ガアアアアアア！」

「そんなこと、させない！」

さつきより強い毒を奴に流し、苦痛を味あわせる

そしてただ、苦痛の声をあげてもがく姿を眺める・・・

この苦痛の叫びと苦しむ姿がイライラを忘れさせてくれる・・・

こいつが苦痛の声をあげる気力が無くなるまで続け、瀕死のこいつを街まで連れて行った。

俺が街に戻った時、既に夜は明けて朝日が昇っていた。

街中に引きずって連れてきた魔法使いを放り投げた。

街の人は沈黙して奴の顔をジッと見た後、顔を知っていたらしく歓喜の声をあげた。

・・・どうやら、『オマケ』は、間に合わなかったか

「やった、スゴイよハヤテ兄ちゃん！」

「・・・ッ！」

「うわあっ!？」

不意に俺に抱きついてきたワイルを振り払い、咄嗟に蹴り飛ばした。

「ハヤテ兄ちゃん・・・何するの・・・？」

「・・・勘違いするな、俺はそいつを苦しめたかっただけ、仲良くなつた覚えはない」

「そんな・・・ハヤテ兄ちゃん」

「大丈夫かワイル！・・・君は、狂っているのか！？」

「・・・」

ワイルのお父さんの言葉に俺は何も返さず、街の外に向かった。

ワイルを振り払ったのは、俺の毒に侵されないようにしただけだ。毒を極力抑えて服の上からでも、数秒で毒に侵されてしまう。

蹴り飛ばしたのは二度と俺に近づかせないようにするため、

だから俺には親しい人などいない、俺に近づけば毒に侵され苦しめる・・・

だから他人の優しさを、温もりを、知らない、わからない

俺が知っているのは、恐怖に怯えた人の冷たさ

わかるのは、生ぬるい血の温かさ

「帝国魔法騎士一同、ただいま到着しまし・・・何だこの状況は！？」

一日遅れて、帝国の魔法使いがこの街にやって来たようだ・・・数は五人・・・ハハハッ・・・よかった。

「その少年、この魔法使いは君がやったみたいだね、礼を言う、何かお礼を・・・」

「・・・よかった、あの雑魚だけじゃ『足りなかった』・・・」

「・・・何を言っているんだい？」

「貴様らの悲鳴で、すべて忘れさせる・・・！」

「ガアッ・・・少年、何を・・・！？　グアアアアアアアア！！」

話し掛けてきた帝国の魔法騎士の首元を掴んで毒に侵させた。

第2라운드의始まり・・・

早く、このイライラを忘れさせてくれ、もっと、苦痛の叫びを聞かせて・・・

2話 颯は知らない（後書き）

はい、やり過ぎました。感想くれると嬉しいです。

3話 逃避と遭遇

「キャアアアアアアアアア！」

街の人たちの喜びの表情は一変、目の前の現状に恐怖し、怯え、逃げに行く

恐怖に怯えただけの悲鳴は嫌い、だって、俺の中のイライラが少しも消えない

人を殺すのもいいけど、生きる苦痛を見ることが、聞く方が俺を落ち着かせる……

「貴様つハンス隊長に何をするんだ、その手を離せ！」

他にいた帝国騎士の男が『装剣』と唱えて剣を出し、刃先を俺に向ける。

首元を掴んだ騎士はハンスと言って、この騎士小隊の隊長らしいハンスは俺の腕を掴み、必死に抵抗している。

苦痛を叫ぶ喉の振動、俺の腕を掴む力、こいつの苦痛が伝わってくる……

いい叫び、あと4人の叫びも合わせたら……このイライラが忘れられそう……

ハンスを首を掴んだまま、持ち上げ、他の騎士4人に見せつけるように突き出した。

「離せ?……そっちから来ないのか? 早くしないと貴様らの隊

長・・・死ぬよ」

「クッ・・・誇り高き帝国魔法騎士に牙を剥くとは、覚悟はできているのか！」

オオオオオッ！と声をあげて帝国騎士が剣を構え斬りかかって来る1人、2人、3人、剣撃をかわし、後ろに流す。
4人目の剣が振り降ろされる瞬間、業とかわさず奴らの隊長ハンスを盾にする。

帝国騎士の剣はハンスの前でピタツと止まった。
その隙を逃さず、足を蹴ってこけさせて、顔を踏みつける。

「卑怯・・・と言いたそうな顔だな」

踏みつけられた騎士が横目で俺を睨んできていた。
まあ正義とか言う奴らは正々堂々の勝負が基本だから、当然の反応
大戦期の頃はドロドロした汚い戦いもあったと思う・・・

「当たり前だッ人を盾にするなど卑怯以外のなにものでもない！」

「正々堂々の戦いなど、貴様とはできそうにないな！」

「当然、そんな悪人は存在しない・・・」

これは試合のようにルールのある戦いじゃない、命を賭けた戦いに
綺麗も汚いもない

それで言ったら俺は一生正々堂々の戦いなんて、できない。
ただそっちが剣を使うなら、俺も刀を抜くでしょう・・・
刀の柄に手をやり、鞘から抜くと紫の刀身、『病刀』^{びやうとう}の刀身が露わになる。
病刀で踏みつけている騎士を浅く斬りつけた。
斬られた痛みの叫び、斬られた後に襲う毒の苦しみの叫びが街に響く・・・これで二人

仲間が斬られたのを見て、慌てて向かってくる残りの騎士たち
俺は足元の騎士を後ろに蹴り飛ばし、地を叩きつけるように蹴って
飛び出す。

ここで奴らはご自慢の魔法で攻撃することもできた
でも俺が掴んでいるハンスのことを考え、奴らは魔法が撃てないで
いる。

ここで奴らが取ったのは武器に魔法属性の強化魔法をかけることだった。

雷、氷、炎・・・奴らの剣にそれらが加わり、強化される・・・けど
それは俺にとって、何の意味も持たない

交差するとき、奴らの剣に病刀で一撃を与えた。

「何だこれは・・・どうなってるんだ!？」

「俺たちの剣が・・・と、溶けてる!？」

「バカな、貴様何をした!？」

帝国騎士たちは驚いた顔をして俺を見ていた。

そんな二流の鍛冶屋が作った剣じゃ、俺の毒には耐えられない・・・
戦いは十分楽しんだ、苦痛の声を早く聞きたくなつた俺は不意を突き一氣に距離を詰め

目にも止まらない速さで騎士たちに無数の刀傷を与えた。

「「ガアアアアアアアアア！」」

新たに、苦痛を伝える叫び声が街に響き渡つた。

これで五人、地面を転がり回る騎士が4人、俺の手の中で叫ぶ騎士・・・んっ？

「があ・・・っあ・・・あがつ・・・」

俺に掴まれた帝国騎士が青ざめた顔をして、弱り切つた声を出していた。

毒に侵し過ぎたか、完全に身体が毒に支配されている、あと数分も持たない・・・

結果として、4人の苦痛の聲が心地良く街に響いていた。

こいつはもう使えないな、さっさと離しておけばよかった・・・でも、

「人が苦痛から解放され、息絶える瞬間も、悪くない・・・」

ハンスを俺の身長より高く持ち上げ、喉を貫くように病刀を構える。

「――死ね！」

「ヤメテ――――――ッ!!」

ハンスの胸を貫こうとした瞬間、誰かの大きな声がした。

声のした方に目をやるとワイルがいた。涙と鼻水を垂らしてみつともない……

ワイルの声に動きを止めた病刀はハンスを刺す直前で静止していた。

「ワイル、何しに来た……」

「ハヤテ兄ちゃんを止めに戻って来たんだ、今のハヤテ兄ちゃんは間違ってるよ！」

「……」

同じようなことを前にも聞いた、俺の判断を揺らがせる、嫌な言葉・

・

『間違っている』……俺は間違ったことをしてるのか？

俺が悪で、この帝国騎士が正義だとも言っのか？

何も知らない、ただの幻に過ぎない、俺と同じ存在が何を言う……

「ワイル、お前には分からない、俺の苦しみがどんなに辛いか……」

「

「わかるよ！」

「・・・たった10時間、そんな短い時間で俺の10年以上の苦痛がわかる訳ない！」

「わかるさっ！！」

ワイルはその小さな身体で、俺の言葉を一喝する。

何故だ、どうしてそう言い切れる、どうして否定できる・・・何故だ！

「10時間、ハヤテ兄ちゃんと一緒にいた時間は10年と比べるとほんの僅かな時間だけど

その10時間でも、お互いを理解しあえるんだ、埋めることだってできるんだ！」

「ふざけるなっ、お前のような小僧に理解できる訳がない！」

「確かに平和に過ごしてきた僕には想像できないくらい、辛いことかもしれないけど

ハヤテ兄ちゃんに声をかけたとき、とても悲しい目をしてた。

わかるうとしていないだけなんだよ、ハヤテ兄ちゃんは・・・」

「黙れ・・・黙れ黙れ黙れッ！」

聞きたくない、そんな戯言、そんなぬるい言葉、俺の前でしゃべるなッ！

「アアアアアアアアアアアアアアアア！！」

日の光が眩しいこの街で、俺は大きく闇の翼を広げ
ハンスを掴んだまま光の空に飛翔した。

獲物を捕らえ、自分の巣に帰る鷹のように・・・
ワイルの声が届かないところへ逃げるかのように・・・
数分も空を飛行するとワイルの声が届くどころか、街が見えない所
まで来ていた。

真下に見える森に囲まれた泉の辺に降り立った。

「あつ・・・あぁう・・・」

毒に侵させて数分経つハンスはすぐに死にそうな状態だった。
手から離して地面に落とす。

立つ気力も、座る気力も無くなったハンスは仰向きに倒れた。
病刀を逆手に持ち替えて、刃先の照準を頭に合わせる。

「くそっ・・・やく・・・そ・・・く・・・が・・・ちが・・・う・・・」

それがこいつの最後の言葉だった。

とても謎めいた遺言だったが、今の俺にそれを考える気はなかった。
刀に付着した血を払い、鞘に納め、近くの木に背中を預け座り込ん
だ。

色んなことがあったからか、しばらく何も考えなくなかった。
ただ時間が過ぎていくのを待っていたかった・・・

しかし、そんな時間はなかったようだ。

何かがこっちに向かって高速で移動している足音の振動を感じた。
振動からして人間、数は一人・・・誰だ？

どこかに待機していた帝国騎士が残った仲間を見捨ててきたのか？
目を瞑り、足音に意識を集中する。

方向は俺のちょうど後ろを走っていて、足音の大きさは急速に大き
くなってきていた。

すると残り約300メートル地点で足音が止まった・・・

そう思ったとき、後ろの方で何かが破壊された音がして咄嗟に横に
飛んだ。

次の瞬間、背中を預けていた木はバキッと音を立てて勢いよく折れ
た。

それと同時に目で追えないほど速いスピードの何かが現れ、泉の中
にダイブした。

泉の水の大半がダイブの衝撃で水飛沫として天に昇り、短い雨を降
らした。

「・・・何だったんだ、今のは？」

泉に近づき中の方をじっと見つめていると、水の中から一人の少年
が顔を出した。

オレンジ色の髪、透き通るような大きなブラウンの瞳、歳は俺より
2、3つ下か

純真無垢・・・そう言った感じのする少年だ。何故か片手で頭を押
さえている。

まさか、足音の消えた300メートル地点から跳躍して頭突きして

きたのか？

「いてて・・・はりきり過ぎちゃったかな？」

「そこのお前、何者だ？」

「よく聞いてくれました、僕の名前はルカ・アルディン、人呼んで『ルカるん』！」

「・・・・・・」

「ちよつと待つて、ルカるんを一人に行かないでよ！」

「・・・頭が痛い、どうして俺がこんなのに絡まれなきゃいけないんだ？」

「そう言わずルカるんに『ルカるん、俺に何か用か？』って聞いてよ」

「・・・お前、俺に何か用か？」

断じてルカるんなどとは言わないが、そう聞くとルカはニカツと笑顔になって

「ルカるんを兄ちゃんの旅に連れてってくれないかなあ」

3話

逃避と遭遇（後書き）

ちよつとぶつ飛んでしまったか・・・？
感想ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0964z/>

完全なる世界の『孤高の鷹』

2011年12月17日18時53分発行